



メタデータ項目	社会経営ジャーナル第4号掲載論文
題名 Title	椅子のデザインはいかにして社会的に決まるのか - 椅子の社会経済学
作成者 Author	坂井 素思
雑誌名 Citation	社会経営ジャーナル, 2016, Vol.4, pp74-80
発行者 Publisher	放送大学社会経営研究編集委員会
ISSN	2188-1073
巻	Vol.4
ページ	pp74-80
発行年	2016
URL	<a href="http://u-air.net/SGJ/pub/20161101J-Sakai.pdf">http://u-air.net/SGJ/pub/20161101J-Sakai.pdf</a>

## 椅子のデザインは いかにして社会的に決まるのか

－ 椅子の社会経済学 －

坂井 素思

### 要旨

椅子を対象に据えて、人間活動の中に見られる人間間の接続（コネクション）の特性を見ていくことにする。椅子には、体重を支える「脚」、座る機能を支える「座面」、脚を補強する「貫」、背中を支える「背」、そして肘掛けとなる「アーム(肘木)」が基本的な要素となっている。椅子の色や形を構成するデザインは、これらの要素が基本構造を形成していて、それぞれの変形パターンを発展させていると考えられる。とりわけここでは、その椅子のデザインが「デイドロ効果」などの「人と事物との関係」の社会文化的コネクションの影響を受けるような、いくつかの典型例に注目していくことにする。

### 1. 椅子が人間を作る

わたしたちは朝起きると、その後の生活の多くを「椅子」に座って過ごす習慣を持っている。あたかも、椅子を接続点として、わたしたちの現代生活が結び合わされて存在しているかのようである。人間工学のP・オプスヴィックによると、現代の人間を観察すると、「ホモ・サピエンス（考える人）」という近代的で理性的な人間像

というものには限界があって、立って仕事をすることから、むしろ座って仕事をする、そして感性に重きをおく「ホモ・シーデンス（座る人）」へと変化してきているのではないかと指摘されている。

わたしたちは座るという文化を持っていて、1日の日常生活の中で、ほぼ10から20くらいの椅子に座る。ベッドルームやリビングルーム、仕事場や裁縫室、中庭やデッキ、車や地下鉄・バスや鉄道のシートやベンチ、待合室や喫茶店、オフィスや学校、映画館やレストランでは、ほぼ必ず椅子に座ることになる。わたしたちはその場所に合った椅子を利用する。

椅子の「座る」という機能に特徴があるのは、服や靴の次に位置するくらいに、日用品の中でも身近に接しているものであるという点である。椅子に座ると、他の家具では考えられないほどの身体的な接触を行う。アームを手で触れるし、臀部が座面に触れる。また、背中が背板に接するだけでなく、足の代わりに椅子の脚部が全体の体重を支えることになる。身体の部分的なところが触れるだけにとどまらず、身体全体が関係して椅子との接触を保つことになる。

けれども、グレン・クランズ著『Chairs』で指摘されているように、確かにまだまだわたしたちはこの生活の伴侶たる椅子たちのことについて、知らない部分が多い。「わたしたちの生活の中で、極めて親密な場所であるにもかかわらず、わたしたちは椅子のことはあまりに知らないし、物的にかつ精神的にどのような影響がわたしたちに及ぼされているのかについても、ほとんど認識していない」といわれることになるのだ。

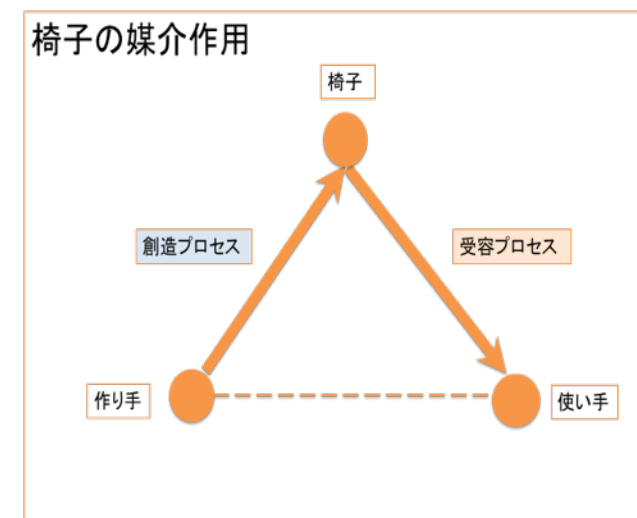
そして、確かに「わたしたちは椅子をデザインし組み立てるが、ひとたび作られると、椅子はわたしたちを形造る」と言える。ここ何世紀にわたって、わたしたちが座る椅子は、〇〇様式であると

か、〇〇風であるとか、というような時代の傾向に合わせて作成されてきており、椅子だけでデザインが決定されている場合はむしろ少ない。時代の文化的趨勢やライフスタイルなどの社会的影響のもとに、椅子のデザインは決定されてきている。わたしたちは意識するにせよ意識しないにせよ、椅子に座ることで、人間の座るという機能を満たすと同時に、人間の文化的な機能も満たしてきている。古代エジプトや古代中国の椅子が、権威や名誉、社会の秩序の象徴として、社会的に利用されたこともあるし、椅子の座る機能が技術的に強調されて、シンプルさや座りやすさなどの機能主義的な椅子が作られたこともある。さらに、社会の中でも美的機能がもてはやされて、唯美主義あるいは表現主義的な椅子が制作されたこともある。何れにしても、人が椅子を作るのであるが、椅子が作られると、今度は椅子が人を作るようになる。子ども椅子が大人への体格や人格を育むこともあるのだ。このようにして、人びとの考えが反映された椅子が作られると、椅子が今度は人びとの考えを支配するようになるのだ。同様に、椅子の色や形を決めるデザインは、人間が作り出すものなのだが、椅子のデザインが定められると今度は逆に、椅子が人間の色と形への考え方に対してかなりの影響を与えることになるのだ。

## 2. 椅子の社会的関係性について

椅子の制作者は、昔からこのような椅子の「色と形」を成り立たせているデザインの感性的な傾向とそれを阻害する傾向とがあることに気づいている。椅子の注文主の求めに応ずることで辻褃を合わせてきた歴史が存在する。ここでは、椅子の制作者視点、椅子の使用者視点を乗り越えた、社会的な視点のありうることを求めていくことにする。制作者側のデザイナーだけが椅子を成立させているわけではないし、さらに使用者の観点からだけで椅子が成立するわけ

ではなく、両方の視点が必要だということである。



社会の中に存在する椅子には、その社会の影響を受けて人びとの間に成立する (in-between)、という特徴を見ることができる。1845年から2年と2ヶ月、『森の生活』を一人で暮らした、米国のH・ソローでさえ、その小さな小屋のような住居に三つの椅子を持っていた。「わたしはわたしの家に三つの椅子をもっている。その一つは孤独のため、その二は友情のため、その三は社交のためのものである」といって、一人暮らしの中で、訪問者との社交を大切に考えていたことを著書『森の生活』で述べている。そして、「わたしと行きあうどんな血気さかんな人間を向こうにまわしてもその場は蛭のようにねばることを辞しない者だと考えている」と述べ、社交と社交をつなぐ椅子について、率直に述べている。

ここで重要な点は、椅子が社交を媒介すると同時に、この椅子に付随する「色と形」を作り出す人びとと「色と形」を受け入れる人びとの間においても、相互作用が生じることになるという点である。もちろん、これらの「色と形」がどのようなものに付随するのか、またそれらがどのような社会的影響を受けるのかは、その社会



現場の事情によって異なるし、その社会の範囲によっても異なることになるが、社会に適合するにしてもまた社会に対立するにしても、「色と形」を持った対象物は、社会環境と無関係に成立することはない。いわば環境関係性 (environment-interdependence) という性質を持っているのが、社会の中に見られる「色と形」の性質である。

もっとも、たとえば個人の住宅という建築物の色と形に限るならば、隣近所の建物の「色と形」に関する道徳的な感覚が存在するのは、至るところで見ることができる。住宅を改修する際に、周りの家々から遊離した家の形や壁の色を新たに選択するのには、隣近所の口沙から逃れるためのかなりの勇気が必要である。このために、街全体の色のバランスを見て自分の住宅のデザインを選択することになる。そのために、その街がコミュニティ統合的な街なのか、それとも個人主義的な趣向を示す街なのか、一目瞭然となる。

それでは、どのような要因が、このような社会の中で見られる物の「色や形」を決めているのだろうか。たとえば、椅子について見るならば、社会の中の様々なレベルで、人びとや人と物とを結びつけている。それを媒介するのが、椅子の「色と形」などのデザインである。

この色と形を決定しているのが社会的な要因であり、それは「結び付き、あるいは関係性 (connections)」という穏やかなつながりが椅子デザインの本質であると考えたのは、イームズ・チェアで有名なC・イームズである。シャーロット&ピーター・フィールの書いた著書『1000チェア』の巻頭に掲げられたイームズの言葉があって、それがイームズの考え方を代表している。「結局、製品に生命を与えるものは、結び付き (connections) のディテール (精緻さ) なのだ」「人びとや考えや対象物などのすべてが最後には結びつく。結び付きの質こそ、本質的な質にとって最も重要である」な

どの言葉でわかるように、結び付きということを重視している。

どのような結び付きが、椅子に見られるのだろうか。上述のC&P・フィールは、椅子デザインについては4つの結び付きが存在すると考えている。第1に、デザイナーの考える「機能的関係性 (functional connection)」がある。デザイナーは使用者との関係で、物的に心理的に考えて、使用者が坐る上での機能的なデザインを創造する。第2に、「精神的関係性 (spiritual connection)」が存在する。椅子の使用者との間で、知的、感情的、美的、文化的な結び付きを重視した椅子が存在する。第3に、「基礎構造的関係性 (fundamental connection)」がある。椅子の構造上の問題点を解決して、椅子としての成立を見た椅子が現れた。そして、第4に、椅子がより広い経済社会との関係で成り立つことでわかるような、「社会環境的關係性 (environmental connection)」において、結び付き可能性が存在する。

### 3. 製品補完体とディドロ統一体

椅子の形は、環境と密接な関係にある。椅子が環境に合わせて作られるし、またその椅子はその環境において使用されるからである。椅子は環境に埋め込まれて使用され、活用される性質を持っている。椅子は「色と形」などが表す付随するものと一体のものとして制作される傾向を示すのを見ることができる。

椅子に限らず、消費財というものの一般が制作者や使用者と重なる部分、つまり文化環境というものを持っていることを、「統一体 unity」あるいは「補完体 complement」という言葉で表したのは、文化人類学者のG・マクラッケンである。この考え方は、椅子の持つ「色と形」に関しても応用することができる。椅子には、その椅子に付随し伴うような、それらが「一緒にある」ことを一貫性あるとみなせる補完物 (complement) というものが存在すること

が知られている。椅子の「色と形」は、もちろんその椅子に付随する補完物の一部に含まれている。G・マクラッケンはこのような補完物のことを、「ディドロ統一体」とよんだ。たとえば、インテリアやエクステリアのデザイナーをはじめとして、ファッションデザイナーたちも、このような補完物のセットに対して、「色と形」などのデザインが企てられている。

もっとも、このことに最も敏感に反応したのは、建築家たちである。自分の設計した家や建物の中に、こぞって自分の設計した椅子を配置している。エクステリアである建物の補完物として、インテリアの家具を考えてきた歴史がある。このような建築家が設計した代表的な椅子として、マッキントッシュやフランク・ロイド・ライト、さらにはル・コルビュジェの椅子は有名である。建物の文化的一貫性が、その椅子とリンクすることになるのである。もっとも、ここには1960年代に「インテリア・デザイン論争」と呼ばれるようになった議論が存在するように、エクステリアとインテリアのどちらが、補完物であるのか、あるいは両者一体のものであるのか、という問題は存在する。

たとえば建築家・デザイナーのマッキントッシュの椅子の横縞は、部屋の背景や近くに置いたベッドや机と調和するように作成された椅子の補完物である。また、フランク・ロイド・ライトの事務椅子特有の「色と形」も、紛れもなく彼の設計した建物や部屋の机と呼応している。

なぜディドロ統一体、ディドロ効果と呼ばれるのかといえば、18世紀のフランスで「百科全書」の編集者・執筆者であるドゥニス・ディドロがエッセイ「古いドレス・ガウンと別れた後悔」で、このような効果が生活様式に現れたことを指摘したからだ、とマクラッケンは主張する。

マクラッケンは、18世紀思想家ディドロのエッセイ「古いドレ

シング・ガウンと別れた後悔」の中から、次のようなエピソードを取り出している。ある時、ディドロが赤いドレス・ガウンの贈り物を受け取った。これをたいへん気に入ってしまって、毎日着ていたのだが、そのうちこのドレス・ガウンの色や雰囲気に合わせて調度品を購入するようになり、結局部屋全体が赤いドレス・ガウン調になってしまい、かつての自分好みの部屋が崩壊してしまったということだ。それで、ディドロは失われた部屋の趣味をたいへん嘆いたのだ。

この「ドレス・ガウン」を「椅子」に置き換えてみることも可能だろう。椅子に合わせて、部屋のインテリアを考えたり、テーブルに合わせて椅子を考えたりということは、日常行われていることだ。

マクラッケンは、ドレス・ガウンが作り出した部屋全体を「ディドロ統一体」とよび、このように一つの品物が周り全体へ影響を及ぼす効果を「ディドロ効果」とよんだ。品物の周りには、その品物の「財補完体」が形成され、消費が補完体へ向かい、連続性をもつことになると考えられた。椅子には、ディドロ効果があると考えられ、この財本体と補完体とをつなぐものが「色と形」などを含む文化なのだと言主張されることになる。

マクラッケンの正式なディドロ効果の定義は、「個々人を彼/彼女の消費財補完体全体に文化的一貫性を保つよう促す力」としている。マクラッケン自身は、消費文化論が専門だったので、このように人びとの消費に尾ヒレが付く効果として、このディドロ効果が称えられたのだが、この言葉の射程範囲はもっと大きなものであったと考えられる。

#### 4. ディドロ効果の三つのタイプ

ディドロ効果は実際にどのような作用を及ぼすのだろうか。ディ



ドロ効果には、三つのタイプが存在する。第1に、「デイドロ統一  
体」として成立している財と補完物全体の現状を維持しようとする、保守的な効果を及ぼすタイプだ。マクラッケンは、H・アーレントからの引用として、バラスト (ballast) 効果と、この影響力をよんだ。バラストとは、船が安定性を保つために積んでいる重し

(weight) のことで、ここでは安定機能を指している。たとえば、赤いドレス・ガウンが購入されようと、それによって影響を受けないような逆の影響力が、デイドロ効果には存在するとした。つまり、デイドロ効果の中でも、最も消極的で保守的なタイプとして、このバラスト効果が存在するといえる。確かに、わたしたちは今まで購入して揃った部屋をそのままの状態を維持したいと望む保守的な傾向を持っている。特別なことがない限り、自分の体制を放棄したりしない。

第2に、デイドロ効果の過激で革新的なタイプが存在する。デイドロではドレス・ガウンだったが、ある財が導入されると、その後その導入した人の生活を全面的に変容する力を持つ。一つのモノには、文化的な影響力があって、導入された途端に、この新しいモノが新しい関連品目を要求し始めるとマクラッケンは考えた。

問題なのは、ここでどのようにして保守的で消極的な消費者が革新的で積極的な消費者に変わるのだろうか。たとえば、衝動買いのような、突然変異的なデパーチャー (出発購入) 効果が生ずるのだというのが、マクラッケンの仮説である。現実的には、むしろ友人などからの贈り物 (ギフト) として入ってきたものが、このような影響力の源泉として、デパーチャー (departure) 効果をもたらすと考えられる。もちろん、さらには「色と形」を含むデザインの変容、また広告・宣伝の影響、そして製品開発による革新などが、このデパーチャー効果の起点となりうる。

マクラッケンはこの効果の面白く分かりやすい事例として、「トロイの木馬 (Trojan Horse)」効果をあげている。古代ギリシアのトロイ戦争で、ギリシア軍が巨大木馬を使ってトロイ軍を欺き攻略したことと同様にして、ある消費財がデイドロ効果の防御柵をすり抜けて、製品補完体に潜みこみ、内部の反逆を促進させて、結果として過激な新しい開拓を呼び起こすような、デイドロ効果を引き出すのだ。クルマやファッション、家具やインテリア、娯楽に化粧品などが挙げられており、ここに日用品が加えられ、さらに問題の椅子が載せられても決しておかしくないと考えられる。わたしたちは、自らにとって基本的なモノを手に入れると、それによって、周りのいろいろなモノをコーディネートすることを日常的に行っている。文化的な一貫性を持って、自分のアイデンティティを整えている。

第3に、デイドロ効果がさらにエスカレートする段階として、ローリング (大きくうねって回転して進んでいく) 効果が指摘されている。デイドロ統一体が「補完物」である段階から、「本体」に格上げされるに従って、周囲の事物に対して、より高度の支配力を行使するようになる。デイドロ統一体のローリング (rolling) 効果には、「色と形」などを通じて、連続的な影響力を行使する傾向をみることになる。

## 5. 椅子の「形」とデイドロ効果

椅子の形が社会文化的な影響を受ける事例として、ここでは日本の椅子デザインに多大な影響を与えた、椅子の北欧型デザインを取り上げて考えてみたい。北欧デザインの椅子は、ハンス・ウェグナー、アルネ・ヤコブセン、フィン・ユールなどによって継続して作られてきており、1940年代以降世界の木製椅子のモデルとして、世界に広まってきている。なぜ北欧デザインの椅子の「形」がこれ

ほど世界中に、そしてとりわけ日本に浸透してきたのか、その理由をデイドロ効果に沿って考えてみたい。たとえば、ハンス・ウェグナーの「Yチェア」は、この点を見る上で典型例であると言える。

(写真参照)



第1に、上述したバラスト効果の点から見れば、日本に本格的に北欧デザインが入ってきたのは、1950年代になってからであり、それまでの伝統的な日本の木製椅子とは異なるデザインに対して、当時は違和感があったと思われる。北欧デザインに対するデイドロ効果は、当初マイナスの消極的な効果がはたらいたと考えられる。当時は、一般庶民にとってはまだ畳の和室が中心であったから、北欧デザインがこれらの部屋に適合するわけではなかった。日本の社会文化と北欧デザインの最初の出会いは、西洋風の住居を持っていた一部の富裕層ではとにかくとして、庶民にとってはそれほど仕合わせなものではなかったと言えよう。従来からの生活にしたがった椅子を求めていた、多くの人は新しい椅子のデザインには否定的であった。つまりは、バラスト効果がはたらいたといえる。

第2に、デパーチャー効果の点から見ると、北欧の椅子はその後

始まる北欧デザインブームの先駆けともいえるものであった。たとえば、「チャイニーズ・チェア」から発達した、写真のウェグナーの「ラウンド・チェア（通称ザ・チェア）」や「Yチェア」には、この椅子自体の持つ「形」の素晴らしさがあるとともに、まずはこの椅子に座ってみたいと思わせる魅力が存在する。人目を惹くのは、特徴のある、肘掛から背部へ回る曲木による「笠木」であるが、このデザインが世界に広がることになった。もし理由付けするならば、いくつかの機能的・装飾的なデザインの出発点を見ることが可能である。第1に、制作者の立場から見れば、曲木技術の採用で、背板や背スピンドルを省略することが可能となり、かなりの生産的効率を上げることが可能であった。第2に、椅子の使用者の立場から見れば、北欧のシンプルで機能主義的なデザインを楽しむことができる。当時の日本人にとっては、このデザインを受け入れることは実験的な試みであったかもしれないが、現在から見れば、明らかにこの時代にその後のモダンやポストモダンのデザインの出発点が存在する。そして、第3に、中国の伝統的なデザインをヒントとして考えられているとはいえ、それ以上に、伝統的な中国デザインを超える北欧デザインの方向性を開拓したといえる。

第3に、デイドロ統一体のローリング効果としての観点から見れば、その後の日本における北欧デザインの浸透には目を見張るものがある。日本の住宅事情が好転した時期に当たるという、社会文化の影響は見逃すことができないが、それ以上に北欧デザインが多く日本の椅子職人の中にも定着して、椅子のデイドロ統一体が累積されてきたことが大きかったといえる。

## 6.まとめ

この小論では、椅子の「形」を対象に据えて、人間のデザイン活動の中での位置付けを見た。椅子の形は、歴史の中で、テクノロジー



ー中心の「機能主義」と人間工学的機能主義などの機能主義の流れの中と、これらに対置される流れである装飾的で感性を取り込む傾向を持つ「表現主義」的な流れとが見られてきたことがわかった。椅子の形については、これらの流れに従って、基本構造が形成され、それぞれの形のバリエーションを発展させていると考えられる。とりわけここでは、その椅子の形が「デイドロ効果」などのような、「人と事物との関係」や「人と人との関係」に見られる社会的文化的コネクションの影響を受けている事例に注目してきた。人が椅子を作るのであるが、同時に椅子が人を作るのだ。椅子が人間の文化デザインを育むのだ。このようにして、人びとの考えが反映された椅子が作られると、今度はデイドロ統一体が作用を及ぼし、椅子が人びとの考えを支配するようになるのだ。椅子は人間とモノとを接続（コネクト）し、さらに人間と人間を接続（コネクト）する。この接続（コネクション）によって、椅子は人間に対して社会的にかなりの影響を与えることになる。

#### 参考文献と注

- Cranz, G. (2000). *The chair : rethinking culture, body, and design*: W.W. Norton.
- Opsvik, P., 訳 島崎信, 豊田成子. “座る”を考えなおす. 東京: ガイアブックス.
- Pile, J. F., 訳 大橋竜太, 末永航, 高木陽子, 田島恭子, 田中厚子, 渡辺真弓 (2015). *インテリアデザインの歴史*: 柏書房.
- 多木, 浩二, 多木浩二追悼記念出版編纂委員会. (2013). *視線とテキスト*. 東京: 青土社.
- 山口, 恵里子. (2006). *椅子と身体*. 京都: ミネルヴァ書房.
- 島崎, 信. (2002). *一脚の椅子・その背景*. 東京: 建築資料研究社.
- 島崎, 信, 生活デザインミュージアム. (2003). *北欧4人の名匠のデザ*

- イン* (Vol. 043 . 美しい椅子 ; [1]): 榎出版社.
- 池田, 三四郎. (1972). *木の民芸 : 日常雑器に見る手づくりの美*: 文化出版局.
- 池田, 三四郎. (1982). *三四郎の椅子*: 文化出版局.
- 鈴木, 紀慶, 今村, 創平, 内田, 繁. (2013). *日本インテリアデザイン史 = The history of interior design in Japan*: オーム社.
- Fiell, C., Fiell, P., 訳M., Junko. (2010). *1000 chairs : 1000チェア*: Taschen.
- Koenig, G., 訳大野, 千鶴. (2008). *チャールズとレイ・イームズ : 1907-1978, 1912-1988 : ミッドセンチュリー・モダニズムの先駆者たち*: Taschen.